

西松布 咏

ニュアンスの会を聞く

佐久間 俊 治

七月十八日夕、日比谷公園内の松本楼ホールで、西松布咏主催のニュアンスの会を聞いた。

師匠の新しい試みということで、一体どんなものが出てくるのか、期待と不安が半々で出かけたが、結論から云えば、中々好感の持てる演奏会であった。

詩の朗読や舞踏とチェロとの組合せなど、一見奇妙な組合せが、意外と自然に融合して、一種独特な雰囲気醸し出し、なるほどこういう取り合わせもあるのだなと素直に頷かせるものがあった。

先ず師匠の弾き唄いで、まは山谷、晴れて雲間に、他の端唄が始まったが、我々にもおなじみの曲ばかりで、師匠の艶やかな声が良く通り、取り敢えずはと安心感が広がる。

その中で、晴れて雲間に、は、ご存知、さし込む腕に入れ墨子、という歌詞がある随分エッチな唄である。今を去る四十数年前、まだ私が会社に入りたての若輩の頃、神田の飲み屋で偶然隣合わせた神戸の船会社の爺さんにすめられて、春日流の小唄を一年程習った時のことを思い出した。その時の師匠が、名も同じ胡美紗さんという美人で、すくすく色っぽい唄だけを教えて、と頼んで習った唄の一

つがこの唄だったからである。藪とは二、三ヶ所メロディが微妙に違うが、気になる程の差ではない。

さて話を戻して、次は富本の「百夜菊色の世界」と前衛詩人北園克衛の詩「黒い肖像」、ブルが、若林淳さんの舞踏と共に、山口椿さんのチェロを伴奏として師匠の弾き語り唄われた。

此の頃から外に闇が拡がり始め、全身白塗りの若林さんの異形が、蠟燭の光の中に妖しく浮かび上がる。チェロの伴奏は、師匠の弾き唄いを引き立てる様に、むしろ遠慮気味にフォローしているが、三味線との組合せに不自然さは全く感じられず、鬼気迫る様な舞踏の白い姿も、唄と合つて、異様な世界が出現した感があった。

前衛的な詩に三味線で曲をつけるのも新しい試みだろうが、更に洋楽器との組合せとなると先ず驚きの方が先に来まして。でも考えてみれば三味線もチェロももとは印度か中近東辺りが始まりで、西と東に別れて行ったものだろうから、師匠の試みも、オリジンに戻らうとする意外と自然な流れなのかも知れない。

そのあとの藤富保男さんの詩の朗読は、ご本人の飾らないお人柄の良く出た、一寸とほけた様な味のあるもので、

舞台で横を向いて語るなど、やはり新しい試みのだろう。ジョンソルトさんのトークと自作英詩や日本語の詩を自ら翻訳したもの、朗読は大変に好ましいものであった。私自身、昔俳句の英訳で苦労したことがあり、英詩には特に興味があるので、面白く聞かせて頂いた。今度会つたら、翻訳のコツを聞いてみたいと思う。

当日は師匠を始め、日本人がほぼ全員洋装だったのに、アメリカ人のソルトさんだけが着物の正装だったのもユニークで良かった。

松岡正剛さんの司会とトクは、いつも乍ら品が良く、よどみなくて好感が持てた。

日本の伝統芸能・芸術に造詣の深い方なので、酒を飲んで小唄を唄っているだけでなく、たまには、こういう人の話を聞いて勉強することを弟子達にもお勧めしたい。

演奏会のあとのパーティーも挨拶等があまり無く感じ良かった。松本楼の有名なカレーが売られて、追加に次ぐ追加となっていたが、それにしても日本人はカレーが好きですね。最後に、演奏中、野外音楽堂で同時に進行していたロックバンドの騒音に邪魔され、著しく興をそがれる場面があった。以前の、にっぽん丸の演奏会で、会場として不適の音が出ていた位だから、今後会場の選定に当たっては、予測される外音の詳細な事前チェックが望まれるところである。以上

ニュアンスの会を終えて

西松布 咏

三味線音楽を伝統の音としてだけでなく、今の音として表現したい。ずっと心の中で想っていた夢が今回の伝統前衛となり「ニュアンスの会」となりました。

千九百二十一年に日比谷公園で平戸廉吉が、一枚のピラを配ったことから日本未来派運動が始まったとソルト氏から聞き、今回のタイトルにふさわしいと松本楼を選んだのですが、はからずも野外音楽堂のロックコンサートとぶつかりまさしく一枚のガラスの屏風を隔てて古と今の出逢いとなってしまいました。

このコンサートを開くにあたって、松岡正剛氏・ジョンソルト氏と何度も討論を重ね、いつもと違う会にした

いと願ったのですが、何層にも光と影が重なり合った内容となったのは、偏に頼もしい五人の男性ゲストのお陰と今でも感謝しております。

あの日は梅雨の晴れ間のさわやかな一日で木々を渡る風が色濃く緑の葉を揺らす様が、舞台の見事な借景となりました。藤富保男氏の朗読と私の三味線の唄で演じた幻想詩「月」の頃には、あたりに紫色の唄が降りはじめました。富本「百夜菊色の世界」ではそれが漆黒の闇となり左右のろうそくが妖しく揺れる中で山口椿氏のチェロと私の三味

線の響きが若林氏の躍動する白い肢体と融合し、古と今が一つの世界となっていたような気がします。

北園克衛の最後の作品となった「ブル」は、私の大好きな詩で海外でもコントラバスやコンボとジョイントし好評を博しましたが、今回はチェロと舞踏との組合せで又新しい波がうねったかのようでした。

最後は「黒い肖像」をフレンジコのようなリズムで激しく寂しく余韻が残るようにと意図したのですが――。

私にとって初めての試みである三味線と舞踏が、見事に融合したのは嬉しい収穫でした。

会の数日後、舞踏の創始者土方巽の奥様であられる元藤嬢子氏が主宰されているアスパスト館でのワークショップに参加しました。その日はジョンソルト氏がリラックスした雰囲気の中で「浮世絵にみるオナラとカラダについて」をスライドを使って講演。最後にスライドの画面にイッセイミヤケの衣服を大きく映し、テレビのビデオに大野一雄氏の舞踏を映しながら、西松文一師と私の「ゆき」をスタジオいっぱい流した時、あたりは、一瞬雑然とした違和感がたゞよいはじめました。

やがて潮がひくように色々な音と映像がひとつに束ねられ一本の糸になった時の驚きが今でもよみがえります。そして夢からさめたようにひとりの若い舞踏家が「ゆき」のゆつたりとした糸にあやつられるように踊り出したのです。

その夜は、まさしく伝統前衛を体感したような気がし

ます。土方巽も晩年は、日本の伝統の型である歌舞伎にかえっていったと言われています。「ニュアンスの会」は、私にとつて冒険と思索の中で終えましたが、これから又未知との出逢いによつて新たな「ニュアンス」が生まれるように心をニュートラルにして新鮮な気持ちで精進してゆきたいと思っております。

今後の予定

十月一日(木)

花柳瀧二の会

一時半より国立小劇場

十一月八日(日)

「由縁の月」「縁の網」

の地方演奏

第十六回美紗の会

おさらい会 一時より 銀座ニユーアサヒ

十一月十四日(土)

guiの会

新宿ピットイン

浅川マキ・渋谷 猛 他とコンサート